文 **マルコ・フェリ**　写真 **トマソ・サルトリ**

時を超えた癒しの家

フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ薬局は、
現存する世界最古の薬局のひとつであり、
その歴史は13世紀に溯る。最高級の自然素材を
使った製品は、かつてドミニコ会の修道士が
病を癒すために調合した、薬剤や軟膏、
クリームの製法に従ってつくられている。

（右下）マリオット・ティ・ナルドによるジョット風のフレスコ画。
（左下）1612年以降歴代の薬局長の肖像画が並ぶグリーンルームの壁。

収蔵するアンティークのガラス器具。
［右ページ］
（左上）玄関ホールの天井。
（右上）18世紀後期に完成した、スカーラ通り側の入口。

［21ページ］
1848年の修復で、修道院の礼拝堂のひとつが販売室に改装された。
［当ページ］
薬局の博物館が

「訪問者はここで立ち止まり、薬局へと通じるその端麗な扉と階段にしばし見とれることだろう」。1790年に綴られた、この一節で始まる文章のなかで、ドミニコ会の修道僧ヴィンチェンツォ・フィネスキは、サンタ・マリア・ノヴェッラ教会の巨大な修道院の扉について記している（修道院は現在、イタリア国家治安警察隊「カラビニエリ」の下士官学校の一部となっている）。

サンタ・マリア・ノヴェッラの敷地には、ふたつの建物――教会と薬局が存在している。フィネスキの時代、この薬局は、ヨーロッパを巡遊する博識な旅行者の間で立ち寄るべき場所とされていた。薬局は、その時すでに、6世紀もの長きにわたりその存在が知られており、1541年から事業が営まれてきたことが、最初の帳簿に記されている。

1221年にドミニコ会修道士の一団がフィレンツェを訪れ、修道院に居を定めた時から、サンタ・マリア・ノヴェッラの地では、薬草が栽培されている。修道院内の小さな診療所で薬剤や軟膏、クリームが調合され、今日まで続く歴史の幕が上がった。

1612年、増加する薬剤の需要に応えるため、修道士アンジョロ・マルキッシは、一般の人々も薬局を利用できるようにした。かくして、メディチ家礼拝堂の設計者マッテオ・ニゲッティの手になる美しい扉は文字通り開け放たれた。時のトスカーナ大公、メディチ家フェルディナンド2世とその一族が常連の顧客となり、薬局にはフレスコ画や有名な彫刻が飾られた。大公は「薬局の素晴らしさ」を認め、この薬局に大公御用達蒸留所の称号を与えている。

ドミニコ会の薬局とメディチ家の関係は、これより前の16世紀前半に溯る。大公の遠縁にあたるカテリーナ・デ・メディチのために、アックア・デッラ・レジーナ（王妃の水）を調製したのがその始まりである（現在も、ベルガモットなどの柑橘類を用いた当時の処方による製品が「アックア・ディ・コローニア・サンタ・マリア・ノヴェッラ」の名で販売されている）。王妃の水は、カテリーナがヴァロワ家のアンリ（後のアンリ2世）のもとへ嫁ぐ際に、フィレンツェの名産品としてフランスに伝えられた。これが、オーデコロンの始まりとされている。

18世紀後期、スカーラ通りに面した入口が新設された頃、薬局の評判は国境を越えて広がり、ドミニコ会の製品は、遠くロシア、インド、中国でも名声を得た。これは、薬局を訪れた旅行者の口コミによるところが大きい。製品の売れ行きが伸びると、建物の用途も変化した。1378年にチョンピの乱が起きた際に、「神の民の八聖人」として知られる八人委員会のメンバーが身を隠した歴史的建造物サン・ニッコロ礼拝堂は、薬局の倉庫として用いられた。

その後、1848年に薬局の全面改修が行われた。博物館を擁する歴史的な部屋から販売室にかけての調和が見事で、ますます魅力的な空間に生まれ変わった。現在ハーブ専門店として豊富な品ぞろえを誇るこの薬局を訪れる客は、グリーンルームと呼ばれる、18世紀のインテリアとドミニコ会の紋章で装飾された、気品漂うレセプション・ルームを通り、感覚を心地よく刺激する販売室で買い物を楽しむ。かつて18世紀に、薬局の名物であるアルケルメス（スパイシーなドリンク）やキーナ（キナノキの樹皮から抽出した治癒効果の高い成分を含むエクストラクト）が供されたのは、この部屋だ。しかし当時何よりも流行していたのはチョコレート・ドリンクだった。

1866年、イタリア政府は、国民に対する宗教の影響力を弱めるため、教会の財産を没収するという策に出た。薬局の事業所有権も国の手に渡った。しかし、その後間もなく、ドミニコ会系列の最後の薬局長の甥にあたるチェーザレ・アウグスト・ステファニが薬局の借用権を継承し、社名、営業権、動産も買い戻した。薬局はその後、四代にわたって彼の一族に受け継がれることになる。

薬局は、1980年代末に経営危機に見舞われるが、その時、会社の運命を大きく変える出来事が起きた。トローチ製造機の修理を依頼された、常連客で技術者のエウジェニオ・アルファンデリーは、薬局が安値で売却されようとしていることを知り、会社を買い取ることにした。彼は、それから数年内に、共同経営者たちから経営権を買い集め、2000年以降、世界5大陸に店舗とフランチャイズを展開する上場会社に成長させた。こうして事業の拡大に成功した後も、薬局はスカーラ通りに建つ4フロア約1100平米の店舗を本拠地としている。

正面入口から店内に足を踏み入れ、グリーンルームへと続く廊下を数メートル歩くと、忘れがたい香りと眺めに誘われる。ここでしか体験できない、感覚の旅の始まりだ。薬草から抽出した精油の香気が、建物の内部で渾然一体となり、感情を揺さぶる。それは、今日ではハーブ製品が発売されている、アンティカ・スペツェリア（旧薬局）の部屋で最高潮に達する。周囲には、コ

旧薬局アンティカ・
スペツェリアに設えられた
18世紀の華麗なキャビネットや
備えつけの家具。
当時ここには薬局の製品が
保管されていた。

ロン、トリプル・エッセンスやピュア・エクストラクト、スキンケアとヘアケアのためのプロダクト、石鹸、クリーム、特製ポプリなどの香りが充満している。それらはみな、現在も地元で採れるハーブや花を使ったものである。

2012年に、創設400年を記念して修復され再オープンしたエリアも含め、スカーラ通りに立つ店舗の歴史的な室内装飾は素晴らしく、見応えがある。かつての商品運搬用リフトの縦穴で発見されたフレスコ画は、階の途中で停まる顧客用エレベーターから鑑賞できる。

博物館のスペースも拡張され、薬局の歴史的な生産設備や、中世の錬金術師の工房からそのまま持ってきたようなフィレンツェボトルなどの貴重なガラス製品、手描きの薬瓶などが展示されている。また過去数百年にわたって大切に守られてきた銅や青銅製の器具類も見られる。サン・ニッコロ礼拝堂にある博物館の図書館には、こうした展示物に関する貴重な資料が収蔵されており、訪れる人々に基礎知識を提供している。また、室内の壁を彩るマリオット・ディ・ナルドのフレスコ画は、美術史家アンナ・ビシェリアの指導のもとで修復され、輝きを取り戻した。フィレンツェ歴史遺産委員の前委員長クリスティーナ・アチディーニは、一連の作品を「国際ゴシックとルネサンスをつなぐ未知の芸術家の作品」と評している。

2014年5月に開園したアロマティック・ハーブ・ガーデンは、塀に囲まれた庭園を再現したもので、樹木や花、薬草が訪れる者の五感をくまなく刺激する。室内装飾やその歴史の豊かさを解説してくれるガイドの声は耳に心地よく、9種のチョコレートに多種多様な蜂蜜、ジャム、ビスケット、菓子が触覚や味覚も満たしてくれる。試飲コーナーでは、チョコレートやコーヒー、薬草茶のほかに、リキュール、ブレンドティー、ハーブティーなど、昔ながらのレシピから健康補助効果のあるものまで、さまざまな飲み物を試飲できる。

サンタ・マリア・ノヴェッラ薬局の未来は、エウジェニオ・アルファンデリーが取り組む伝統と革新のさじ加減にかかっている。販売する製品の原料やレシピに関する伝統は厳格に守られ、スカーラ通りの本社からわずか3キロの場所にある超現代的な工場で製造される。革新は未来へのパスポートだ。同社の製品は、フィレンツェだけでなく、イタリアそして世界の大都市で販売されている。しかし、「直販店の数を増やすより、歴史的事業の価値を高めたい」と、アルファンデリーは言う。彼いわく、サンタ・マリア・ノヴェッラ薬局にとって、「4世紀を超える歴史は、唯一無二の文化遺産」なのだ。✥

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。